



京都市文化観光資源保護財団

会報

No.53



もくじ

京のよさをまもって(16)「京都北白川風土記」

北白川愛郷会会长 西村 藤平 P 4

古い寺に住んで(30)

月輪寺住職 横田 智照 P 6

京のみちを歩く(13)「清滝から愛宕山へ」

P 7

目で見る京の文化財(23)「京の古面と行事芸能」

P 8

わたしと京の文化財(19)「みんなで守ろう京都の文化財

—京の図画・作文・詩コンクール— P 10

京の伝統行事芸能(16)「糺の森流鏑馬神事」

賀茂御祖神社宮司 鈴木 義一 P 12

文化財あれこれ(2)「生活のなかの文化財

—久多郷土文化保存伝習館～

P 14

会報題字 理事長 佐伯 勇
表紙 舞楽「納曾利」

会報
No.53 1989. 1. 1

編集・発行
財団 京都市文化観光資源保護財団
法人 京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内
〒606 電話 075-752-0235（代）

新しい年をむかえて

新しい年のはじめに、みなさまのご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。

昨年は、当財団の運営に格別のご支援、ご協力を賜わり厚くお礼申し上げます。

本年は、当財団にとりまして設立20周年を迎える記念すべき年であります。

この年のはじめにあたり、京都の貴重な文化観光資源を保存、継承するための大きな力となるよう一段の努力をしてまいりたいと存じます。

皆様方におかれましてもより一層のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

財団法人京都市文化観光資源保護財団

会長(京都市長) 今川正彦
理事長 佐伯 実

**募金にご協力いただき
ありがとうございました**

寄付者芳名録(敬称略) 63.8.12~63.11.14

—法人及び団体の部—

〔特別会員〕	
※三菱信託銀行株式会社	<1550万円>
※東洋信託銀行株式会社	<1150万円>
※株式会社三井銀行	<700万円>
サントリー株式会社	<300万円>
大日本スクリーン製造株式会社	<300万円>
〔普通会員〕	
※京阪コンクリート工業株式会社	<48万円>
※株式会社鶴屋吉信	<35万円>
〔旅館松葉亭〕	<24万円>
〔マルホ株式会社〕	<10万8千円>
〔ヤマカワ株式会社〕	<10万3千円>
〔株式会社日産建設〕	<10万円>
〔山崎建設株式会社〕	<10万円>
〔贊助員〕	
※トクデン株式会社	<6万5千円>
※東邦炭素工業株式会社	<4万円>
※株式会社岩佐商店	<3万5千円>
※有限会社佐々木勉強堂東店	<3万2千円>
※明和管工業株式会社	<2万3千円>
〔個人の部〕	
〔特別会員〕	
※今井 雅治	<24万円>
※岡本 保止	<20万2千円>
※丸山 未樟	<19万9千円>
※奈良 行博	<19万円>
〔普通会員〕	
※竹内 キミ子	<16万5千円>
※竹内 孫兵衛	<15万5千円>
※高橋 一男	<15万4千円>
※上野山志津子	<15万円>
※今井 栄一	<14万円>
※佐藤 昭三	<13万円>
※村田 陶菴	<12万円>
※三原 慶三郎	<11万8千円>
※土手 修	<11万円>
※安田 孝夫	<10万3千円>
※神崎 順一	<10万円>
〔普通会員〕	
※加藤 雅一	<9万4千円>
※奥崎 一郎治	<9万円>
※大嶋 真治	<8万5千円>
※横山 政二	<8万円>
※岩井 貞三	<7万1千円>
※辨官 弘晃	<6万8千円>
※山崎 長三郎	<6万7千円>
※矢野 芳子	<6万4千5百円>
※平野 昭子	<6万1千円>
※三宅 康雄	<5万3千円>
※笹山 十八	<5万2千円>
※内田 和正	<5万1千円>
※原 満寿子	<5万円>
福林 松子	<5万円>
※今井 憲一	<4万9千円>
※遠藤 伊之助	<4万8千円>
※大野 健三	<4万8千円>
※金井 利夫	<4万8千円>
※松島 浩子	<4万8千円>
※平野 和彦	<4万1千5百円>
※駒井 桂之助	<4万1千円>
※西原 寿子	<3万6千円>
※小松 好子	<3万3千円>
※野村 鉄治	<3万3千円>
※舟木 八重子	<3万3千円>
辻寅三郎	<3万円>
※盛田 准子	<2万8千円>
※梶村 ふみ子	<2万6千円>
〔贊助員〕	
※佐村 伸一	<2万4千円>
※松本 善次郎	<2万3千円>
※高廣 康子	<2万2千7百5拾円>
※西田 實	<2万2千円>
〔贊助員〕	
※古川 茂一	<1万5千円>
※杉田 実	<1万2千円>
※川村 弘子	<1万1千円>
※田中 定子	<1万1千円>
※萩原 泰子	<1万1千円>
※小川 仁作	<1万円>
内藤 嘉子	<1万円>
※林 寛子	<1万円>
※池内 俊夫	<8千円>
※岡春枝	<8千円>
※奥野 貴雄	<8千円>
※竹林 はま	<8千円>
※高橋 せい	<7千円>
※稻生 千代子	<6千円>
※石田 裕	<5千円>
※稻田 芳子	<5千円>
※小笠原 澄江	<5千円>
※中川 恵司	<5千円>
松下 日肆	<5千円>
※石見 安英	<4千円>
※今井 春美	<3千円>
※北村 昭三	<3千円>
※坂本 亘	<3千円>
秦慶子	<3千円>
※平野 泰子	<3千円>
※山本 英子	<3千円>
※吉原 和子	<3千円>
※石見 典子	<2千2百円>
西村 明子	<1千円>
松井 重治	<1千円>

〔印は、追加寄付の篤志者。寄付額は累計額。なお、昭和63年11月14日以降の寄付者の方につきましては、紙面の都合により今後順次紹介させていただきますので御了承下さい。〕

**京の文化財をまもる募金へのご協力を
あなたのまわりの方々にも呼びかけて下さい**



京都北白川 風土記

西村 藤平

京都市左京区北白川は、京都の東北に位置し、東は大津市山中町、西は養正、養徳、南は浄樂、北は修学院の各学区に接する東西に長い地域である。

比叡山から大文字山に至る山間部を源とする白川の清流が山地の諸水を集めて山裾を蛇行し、峡谷美をつくりながら山峡を出たあたり、乗願院の西方を要として扇状地をつくった溪流白川の土砂の堆積によって生成した地形であり、地下には伏流水があって乾燥を防ぎ草花の自生に適している高燥、景勝の地である。

東部山地の地質は、大部分が花崗岩より成っており、ここから白川砂と白川石が採取され地場産業となっていた。白川砂は、庭園の敷砂に多く用いられ、砂上に篠目をつけて海の小波や



北白川の石仏 古くから当地にあって庶民の信仰をうけている。



滋賀県に至る山中越えの地蔵谷にある身代り不動。昔、この街道を行く旅人の身代りとなって道中の安全をまもったという伝えが残っている。

川を現わし名園になくてはならない存在となっている。白川石は、燈籠、手水鉢等に多く利用されているが水晶のような光沢を有し、年と共に独特的な寂を生じるので落ちついた気品と風格は、日本庭園に好まれている。白川石でつくった代表的なものとしては、北白川天神宮前の白川に架る萬世橋、白川口にある子安觀音（大石仏）、地蔵谷にある身代り不動尊等がある。

東に通じる道として荒神口より東北に向い東一条へ、白川口より山中を経て滋賀里に至る志賀越え、山中越えとして知られ、京と近江国を

結ぶ道として都が京に遷って以来「京の七口」に準ずる道であり、北白川集落は重要な地点である。

昭和9年、京都市左京区北白川小倉町に於て、繩文前期の住居跡が発掘され、その他追分町遺跡、別当町遺跡、上終町住居跡等があり、京都で最も早くから人の住みついた所であるだけに埋もれている遺跡、史跡も多いことと思われる。

北白川の西、京都大学農学部付近と東、大津市に接する岩坂町との高低差は約170mあり、この落差を利用して大正の頃には、約29ヶ所に水車工場が営まれていたのである。この頃、一步山峡に入れば、コットン、コットンと水車の音が聞こえ、小鳥のさえずる仙境があり、自然環境に恵まれた地であったが、都市化の波は次第に近づいていたのである。

明治27年、吉田村に第三高等学校、同30年京都帝国大学が設立され、昭和5年小倉町に東方文化研究所（現 京大人文科学研究所）が設立された。また、昭和10年土地区画整理が行われ、整然とした街づくりが進められ、それ以来急速に人家は増え特に教育関係者や大学に学ぶ学生が多くなってきた。この頃より地域住民の教育によせる熱意も甚だしく向上し、その結果、上級校への進学率は飛躍的にあがり、北白川校の名声は著しく高まったのである。

昭和41年洛北宝ヶ池に国立京都国際会館が建設されるに至り白川通（当時十二間道路と呼ばれていた）が完備され、美しい並木道は京都を代表する国際道路となり沿道の建造物もこれに相応した装に変りつつあり、11年前、瓜生山に京都芸術短期大学が創設されて以来、上終町界隈は若者で溢れ、街の様相は一変してきた。

いま、北白川にはかつての田園風景は見られなくなり、文教の街、良好な住宅地域として健全な発展をなしつつあることは誠に喜ばしい次第である。地元地域では次のような団体をつくりそれぞれの目的に向ってなお努力している。

1. 北白川愛郷会 昭和30年4月に発足し会員数630名で、愛郷精神に基づき会員相互の親睦並びに教養を図りこれを拡充して郷



白川女 北白川の婦人が四季おりおりの花を京のまちへ売りに歩いたもので、今では見られないなつかしい風習である。（写真：時代祭行列のなかの白川女）



北白川高盛御供 每年10月7日夜を徹してつくった神饌を北白川天神宮へ奉納する行事で、北白川にはこの他にも色々な伝統行事が伝えられている。

土の発展に資し、よりよき地域環境をつくる。

1. 北白川公害対策委員会 昭和54年3月結成し委員は北白川各町内会、北白川各種団体より一名以上と本部役員会より推せんする者をもって構成する。その目的は北白川地域におけるすべての公害を防止し、生活環境の向上を図る。

北白川愛郷会、北白川消防分団、北白川体育振興会の手によって、昭和58年に山の散策路として「北白川史跡と自然の道」をつくり、身近かな山の道として山を愛する方々から喜ばれているが、北白川愛郷会によって整備され植樹も行われている。（北白川愛郷会会長）



古い寺に住んで (30)

横田智照

月輪寺は、京の西、愛宕山の中腹にあり鎌倉山月輪と号し、大宝4年（704）泰澄大師によって開山され、更に天応元年（781）光仁天皇の勅を奉じた慶俊僧都が中興した、鎮護国家の靈場であり後に九条兼実公（月輪関白）も閑居地とし、円光大師（法然上人）二十五靈場第十八番札所です。

又、親鸞聖人お手植のしぐれ桜が境内にあり、今なお葉先よりしづくを降らし、また空也上人が助けた竜のお礼の水「竜奇水」という靈水もあります。他に重要文化財の指定を受けている仏像、千手觀音、十一面觀音、聖觀音、阿彌陀如来、空也上人、九条兼実公、八歳龍女、善哉童子を安置しています。

当寺は、たぬき御殿と異名があるほど山深く



月輪寺境内 屋根葺替工事がおこなわれたばかりの本堂。貴重な文化財をまもりつける苦労は計りしねれ。たぬき御殿の異名どおり夕刻になると境内にたぬきの姿が見られるなど当寺ならではの光景である。（写真右下）

月輪寺
(京都市右京区嵯峨清滝月輪町)
鎌倉山と号する天台宗の寺院である。
寺伝によると、天応元年（782）慶俊僧都を開山とし、寺名は地中より堀り出した古鏡背面の「人天満月輪」の銘によっている。
空也上人も參籠し、清泉龍女は上人と清滝川龍神の話を今に伝えている。平安末期には九条兼実もこの地に閑居した。三祖像は兼実を訪れた法然上人と親鸞聖人が自らを刻んだもので、本堂前には別離を惜んだ親鸞聖人が手植したと伝える時雨桜もある。
宝物殿には、千手觀音立像・阿彌陀如來座像・藤原兼実座像・善哉童子立像・十一面觀音立像・聖觀音立像など平安時代の木像群や空也上人立像（鎌倉時代）・龍王立像（平安時代）など多くの重要文化財がある。
なお、当寺は法然上人二十五靈場の第十八番目の札所である。



月輪寺は愛宕山の山腹標高700mに位置する。

清滝バス停より約3里（約12km）、登山路しかなく不便な生活です。標高700メートル、京都市内

は一望ここからの夜景は、まるで宝石のようです。前住職（父、昭和60年に遷化）から昔の寺の様子をよく聞かされました。当初寺内は荒れ果て、雨の日には傘をさして床につき、食料は肩で運び、ランプ生活、檀家なく苦しい生活の中から寺の復興を手がけてきたと。

昭和50年、収蔵庫建立にあたり京都府・市より補助金を頂き完成、10年の契約で文化財保護基金を借入、又昭和57年に自動火災報知器取付の際に、電気、電話も設置しました。私、昭和61年当寺の住職

に着任しました。昭和63年本堂の屋根雨もりひどくやむなく修繕の運びとなり、度々京都府、市、保護財団へお願いに行くつど、昔の苦労話を笑顔で語って下さり、私、胸がうたれる思いがしました。本当にありがとうございました。

昭和63年10月、京都府、市、保護財団のご協力や信者の皆様のご支援を賜わり本堂の屋根葺替工事も完成10月20日法要を執行しました。永い歴史の重みと文化財保存に責任をもって維持に勤めます。

合掌

（月輪寺住職）



重要文化財に指定されている貴重な仏像を安置する宝物殿

京のみちを歩く（13）

《清滝から愛宕山へ》

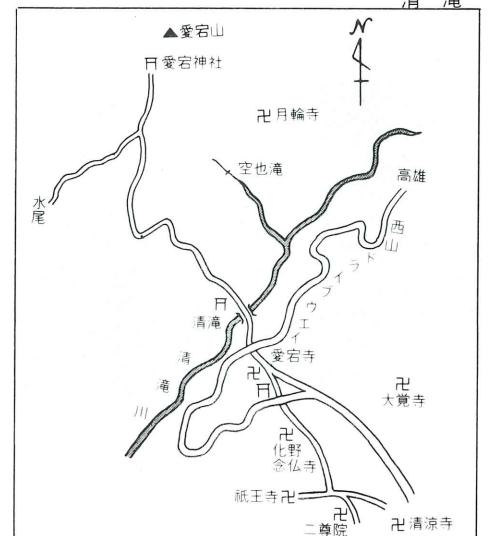
清滝の登り口から愛宕神社まで徒歩で約2時間半と道標にある。自然石や丸太で階段をなしているものの、流水に洗われてところどころ地肌が出ている。

千日詣りの時（7月31日夜）は、この急坂を約3万人が臨時に設営される電灯の明りを頼りに登る。祭時のない時でも、日に百人は数えるとか。京都人の愛宕神社に対する信仰は今もうけつがれている。「おくどさん」の少なくなった今日の家庭にあっても「愛宕さん」は京都人の「ふる里」の山だ。単に信仰の対象としてではなくても、健康のバロメーターとして登山をしてみるものよい。

—「京のみちを歩く」京都市文化観光局観光部発行より—



清滝



京の古面と行事芸能

今回の目で見る京の文化財は、「京の古面と行事芸能」をテーマに京都の伝統行事芸能のなかで、特に仮面を使用しておこなわれる主なものをとりあげ又、そのなかでそれぞれ古くから伝えられている古面や現在、使用されている面などその一部をご紹介いたします。

京都には、美術工芸品としても価値の高い貴重な仮面が数多く伝えられています。

【念仏狂言】



京都特有の民俗芸能に壬生、嵯峨、千本えんま堂、神泉苑の念仏狂言があります。この念仏狂言に使用される面は、古いもので室町、桃山時代のものがあり又、江戸時代のものも数多く伝えられています。



狂言面「稻荷大明神」
室町時代末期



狂言面「平智盛」
江戸時代前期
蔵：壬生大念仏講

【舞 樂】



雅楽は、日本古来の伝統芸能の一つであり、舞楽は雅楽を伴奏におこなわれる舞で、およそ60曲程ありそのなかで面をつけて舞う主なものに蘭陵王、納曾利、還城樂などの曲目があります。(表紙写真掲載)



舞楽面「蘭陵王」
蔵：平安雅楽会



舞楽面「納曾利」
蔵：平安雅楽会

【節 分 会】



京都の節分行事は、社寺を中心に多彩におこなわれます
が、節分会は古来、宮中でおこなわれていた疫神や疫鬼を
追い払う追儺の儀式に起源をもつといわれています。今日
節分会の追儺式で使用される面を追儺面とよばれています。



追儺面「方相氏」
蔵：吉田神社



追儺面「鬼」
蔵：平安神宮

【能 樂】



日本のすぐれた伝統芸能である能楽は、室町時代にはじめられたといわれます。京都には、能楽諸家所蔵の古い歴史をもつ美術工芸品としても価値の高い能面が数多く伝えられています。



能面「小面」
室町時代
蔵：金剛家 室町時代



能面「般若」
室町時代
蔵：金剛家

【祇園祭船鉾の神面改め】



祇園祭船鉾の山鉾町である京都市下京区新町通綾小路下
ル船鉾町では、同町の祇園祭吉符入がおこなわれる日に、
鉾の上に安置する神功皇后の神面の無事を確認するため本
物と写しの二つの面を出して見せる伝統的な神事が行なわ
れます。



祇園祭船鉾「神面」
室町時代中期
蔵：祇園祭船鉾保存会



御神体「神功皇后像」
室町時代中期
蔵：祇園祭船鉾保存会

みんなで守ろう京都の文化財

—京の文化財 図画・作文・詩コンクールより—

京都市では、京都の文化財のよさを認識していただこうと毎年、京都市内の小学生を対象に「京の文化財図画・作文・詩コンクール」をおこなっていますが、今年も735点にのぼる作品が寄せられました。

これらの作品は、いずれも子供たちが京都の文化財に対する自分の気持ちを素直に表現したものであります。今回、これら多くの作品の中からほんの一部をみなさんにご紹介いたします。

なふだの中のひみつ

京都教育大学
附属京都小学校4年
小曾原 由夏

わたしのたん生日は、5月15日下がも神社のお祭りあおい祭りの日だ。

本当は5月28日に生まれる予定だったけど、お母さんは大きいおなかをさすって祭りを見に行つた。そこで急におなかがいたくなつてわたしがうまれた。生まれた所は下がも神社の南がある森医院という所だった。みこさんが、病院まで赤白のまんじゅうとあおい祭りの絵馬をもってきて、「わたしとこのお祭りの日にお生まれになつたお子さんへ」と言ってくれたそうだ。だからお父さんお母さんは「下がも神社にえんのある子やな。きちんとおまいりしなあかんな」と考えたそうだ。

はつもうでや七五三は下がも神社だ。

そして小学校に行き始めて間もない4月、事件をおこしてしまつた。わたしは友だちのハミガキをロッカーにかくしてしまつた。おとうさんもお母さんもこの事を知つてびっくりした。おとうさんはふるえながらおこつた。お母さんもなきながらおこつた。わたしがお父さんがふ



「千手観音」

京都市立西院小学校2年 大田直人

るえながらおこつたのを見たのは、この時だけだ。そしてお父さんとお母さんはわたしをつれて下がも神社へいった。わたしは、かくしたりしなくなるようにいっしょけんめいおまいりをした。お父さんもお母さんもいっしょに手をあわせてくれた。そこでお母さんとお父さんがお守りを買ってくれた。家に帰つてお母さんがお守りを名ふだにぬいこんでくれた。お母さん

が、「よしかを守ってくれるお守りや」と言った。それをじっとみてたわたし。なみだがどつ出了。しっかりしなあかんとおもつた。いつも下がも神社のお守りがわたしのむねにくついて守ってくれている。

今から考へるとはずかしくてたまらない。お母さんが「あの時のあんたは一人でるす番するのもむつかしかったんやろな。学校でも友だちもいいひんからさびしかったんやろな」「そやしあんな事やつてしまつたんやろな。」と言つた。

そして今でもわたしの名ふだの中にはお守りがはいっている。これをつけてるとなぜか安心できる。いつでも下がも神社のお守りがわたしのむねにくついている。

いっしょけんめいな

男の人たち

京都市立大宅小学校5年
池崎 寛典

京都市左京区花せの北山でおまつりがあります。そのおまつりは松上げと言って花せに古くからつたわる男の人たちだけの行事です。

まず天日ぼしという7、8年前からやねうらにひのきをほします。そしてひのきを細くわってしなの木の皮であみしっかり固定します。そしてあげ松といつたまつが30ほどつくられます。こういう作業もすべて男の人たちだけで用意されます。ぼくは用意まで男の人たちだけでやるというのにおどろきました。

そして松上げ前日、山へ行き、まふじこいう木をとりにいきます。そしてまふじをとりかわきを防ぐために川にひたしておきます。そのまふじは言いかえると天然のロープと言います。ぼくは、ロープまで自然の物をつかうなんてび

っくりしました。そして当日、男の人たちは朝から松あげの会場に行き、いろいろな用意をしていきます。その作業の分たんは自然と決まっていきます。その仕事とは、竹を半分にわってよくまいて、ひもで結び付ける。そして20メートルもあるひのきの柱にわらをまいて、川の水にひたしておいたまふじをまきます。

次に、かさ作り。かさ作りは、かごみたいな形を木で作つてまわりにわらをよくまいて、6メートルほどの丸太を3本ほどまきつけて、ひのきの柱にまふじと竹でしっかり固定して、かさの中には燃えやすいはっぱなどを入れて、その柱を立てます。一人が「みんなで力を合わせてえ。」などの合れいをかけみんなが持ち上げる。持ち上げは左右がバランスをとれないとかれる可能性があるので、合れいの人も持ち上げる人も力が入る。そして夕方ごろできあがる。ぼくは、「そんなに号れいの人も大切なのかな。」と思いました。そして8時30分。かすが神社という神社で男の人たちがたいまつをもらって、みんなの待つ広場に行きます。そして安全をいのるため塩をふります。9時。とうとう松上げが始まります。たいまつに火をつけ、20メートルも上にたいまつをなげます。みんなしんけんに、いっしょけんめいにしている。ぼくは、一度松上げを見たいと思っています。そして松上げが終わる。ぼくは、「そんな一しゅんのことどこまでするのはなぜだろう。」と思いました。ぼくは、「やっぱり一度自分の目で松上げを見たいな」と思っています。

糺の森流鏑馬神事

流鏑馬は、射手が馬を走らせながら鏑矢を射るもので、平安時代より公家、武家の間でおこなわれ、鎌倉時代に最も盛んになり様々な流儀や作法が生まれたといわれています。

下鴨神社に伝えられています流鏑馬は、貞觀15年（873）当社において行われた走馬、騎射を起源とするといわれ、明治2年までおこなわれていました。しかし、その後は中絶し昭和48年にこれらの流れをくんであらたな形で復活されたものです。

行事は、毎年5月3日下鴨神社境内の糺の森の馬場で行われ、狩衣に行騰姿、背に簾を負い鏑矢を差した射手が100メートルごとに設けられた3基の的を次々に射ながら約400メートルの馬



場を疾走するもので、続けて三騎おこなわれます。又この後、的を小形にして射手が射胴着、射小手、小袴という軽装で同じく平騎射が行われます。

◆糺の森流鏑馬神事 5月3日 午後1時



馬場は、400メートルの直線に100メートルごとに三基の的が設けてあり、下手から上手に「陰陽」のかけ声をかけ走り出し、簾より鏑矢を抜き取ってかけ声をかけ次々に的を射る。

葵祭の 流鏑馬神事 鈴木義一



賀茂祭（葵祭）は、欽明天皇5年（545）4月、鴨の御社へ勅使を差遣し、社頭で馬を走らす神事を行ない五穀豊穣を祈る祭儀を行なったとあるのが始まりであります。この馬の走る神事を「騎射」（むまゆみ）と称していました。文武天皇2年（698）4月の賀茂祭には、この神事を見ようと沢山の人々が集まったために禁示令（『續日本紀』）が発せられる程でした。その後も度々同様の布告が成されました人がはなお群参りましたとあります。

当神社の記録には、垂仁天皇21年（B.C.8）8月、神宝や馬具などが奉じられたとあり、また、境内糺の森からも古墳時代の馬面や鎧なども出土しており、古くから馬の神事が盛んであったことが察せられます。騎射は、『日本書紀』、安康天皇3年（457）の条に、大泊瀬皇子が「弓をひき馬を馳せた」とあるのが文献で見る最初であります。

『百鍊抄』、建保2年（1214）の条に後鳥羽上皇が当神社へ御幸参拝され糺の森の馬場にて「流鏑馬」が行なわれたとあります。この頃から、騎射を矢伏射馬（やばせむま、或いは、やばさめ）を略して「やぶさめ」と呼ばれるようになりましたと言われています。

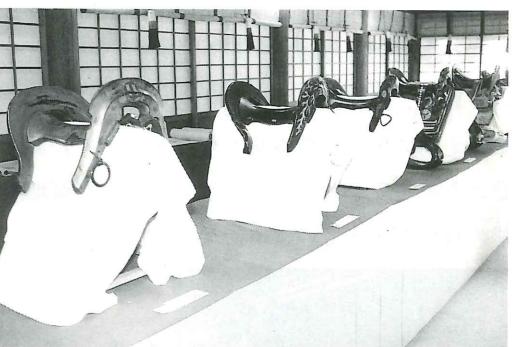
葵祭の騎射は、古代の伝統を受け継ぐ神事であり、朝廷より奉納せられる重要な儀式でありました。元禄7年（1694）、葵祭御再興時にも走馬として再興され、明治2年（1869）まで奉納

せられたあと中絶いたしましたが、去る昭和48年、当神社式年遷宮を記念し、騎射の伝統を継承する流鏑馬として、京都市文化観光資源保護財団や京都府等よりご支援を得て復活を見、毎年5月3日に糺の森の馬場において行なっています。

（賀茂御祖神社宮司）



楼門前にておこなわれる祭儀



下鴨神社には、葵祭、流鏑馬神事など馬事神事に関する古い資料が伝えられている（写真上：鴨社馬事神事関係資料展より 下：江戸時代の和鞍）

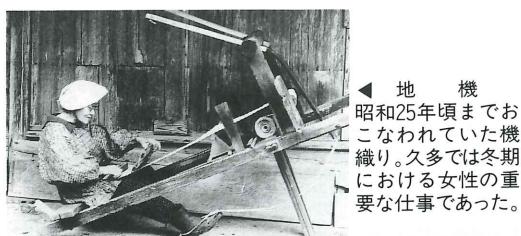
生活のなかの文化財

～久多郷土文化保存伝習館～

京都市の最北端に位置する久多地区は、近江、丹波に境を接し若狭街道沿いの山間部に開けたところで、中世には久多荘として歴史上著名な荘園村落でした。

久多には、こうした古い歴史を背景に生活のなかで伝承されてきた古い農具や生活用具などが多岐にわたって伝存されています。京都市では、これら久多に伝わる古い民具563点を「久多の山村生活用具」として京都市有形民俗文化財に登録し、保存していくことになりました。

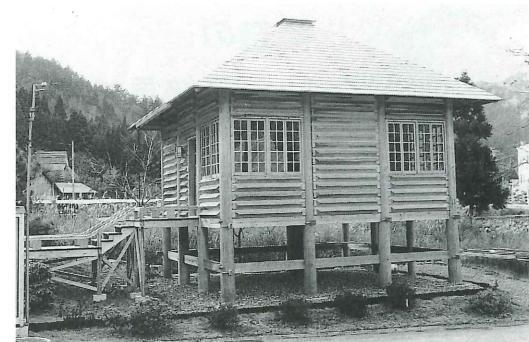
特徴的なものとして紡織関係では、麻、藤といった植物の茎皮纖維の布を織る古い地機が残っており、農耕関係では苗代を整えるシメイタ、田植え前に肥料を踏み込んだうえで田の表面を整えるオオアシなど、古い農業の形態や湿地農耕の技術を伝えています。又、信仰関係では、



◆ 地 機
昭和25年頃までおこなわれていた機織り。久多では冬期における女性の重要な仕事であった。



神殿の衣裳▶輪番の神主神殿による弓ひき神事。ワラゾウリ（エビと呼ぶ）に特徴がある。



久多郷土文化保存伝習館 京都市左京区久多地区に伝わる古い民具約百点が展示されている。

宮座行事で使用されるカナオケ、膳、神殿の衣裳、エビなどが久多の社会組織や信仰生活の豊かさや歴史を示しています。

このほど久多では、これらの古い民具類を収蔵、展示する施設として「久多郷土文化保存伝習館」が建てられました。地元で切り出された桂や杉などの木材を使った高床式の建物で、約百点ほどが展示され、一般に自由に見学できるようになっています。

久多に残るこれらの山村生活用具は、生活のなかで伝えられてきたもので、古い歴史をもつ山間村落の生産構造、生活様式、文化を知るうえで欠くことのできない貴重な文化財であるといわれています。

—「京都市の文化財第4集」京都市文化観光局文化部文化財保護課発行より—

京の主な年中行事（1月～4月）

1月

2日	鉾始め（午前10時）	広隆寺
2～4日	神前書初め	北野天満宮
	(午前9時30分～午後3時)	
3日	かるた始め（午後1時）	八坂神社
4日	蹴鞠始め（午後2時）	下鴨神社
8～12日	初ゑびす	恵美須神社
9～16日	御正忌報恩講	西本願寺
10日	初金比羅	安井金比羅宮
12日	奉射祭（午後2時）	伏見稻荷大社
14日	日野裸踊り（午後7時）	法界寺
15日	柳のお加持と弓引き初め	三十三間堂
	(午前8時～午後4時)	
15日	泉涌寺七福神めぐり	泉涌寺
	(各塔頭寺院日出～日没)	
16日	歩射神事（午前11時）	上賀茂神社
20日	湯立神樂（午後2時）	城南宮
21日	初弘法	東寺
25日	初天神	北野天満宮

2月

2～4日	節分会	市内各社寺
3日	初午大祭	伏見稻荷大社
23日	五大力尊仁王会（午前9時）	醍醐寺
23日	五大力尊法要（午後1時）	積善院準提堂
24日	さんやれ祭	上賀茂神社
	(午前11時～正午)	
25日	梅花祭	北野天満宮
	(午前10時～午後3時)	

3月

10日	芸能上達祈願祭	法輪寺
	(午後1時30分)	
14～16日	涅槃会	泉涌寺・清涼寺ほか
	(午前9時～午後4時)	
15日	嵯峨大念仏狂言	清涼寺
	(午後3時30分～)	
15日	嵯峨お松明（午後7時30分）	清涼寺
30日	はねず踊り（正午）	隨心院

4月

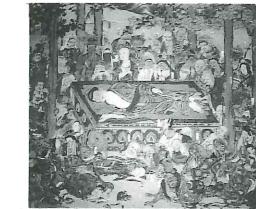
1～18日	観桜茶会	平安神宮
	(午前9時～午後4時)	
8日	花まつり	清涼寺・知恩院ほか
9・15・16日	嵯峨大念仏狂言	清涼寺
	(午後1時30分～)	
9日	太閤花見行列（午後1時）	醍醐寺
9日	やすらい花	今宮神社
	・今宮やすらい花	今宮神社
	(光念寺正午出発・今宮神社午後2時30分頃到着)	
	・玄武やすらい花	玄武神社
	(玄武神社午前9時出発・午後5時30分頃帰社)	
	・川上やすらい花	川上大神宮社
	(大神宮社正午出発・午後2時頃帰社)	
14日	白峯神宮春季大祭	白峯神宮
	(大祭 午前10時30分)	
	（蹴鞠 午後1時30分）	
16日	稲荷祭神幸祭（午前11時）	伏見稻荷大社
16日	吉野太夫花供養（午前11時）	常照寺
19日	お身拭式（午後2時）	清涼寺
21～29日	壬生大念仏狂言	壬生寺
	(午後1時～5時30分)	
23日	松尾大社神幸祭（午前10時）	松尾大社
29日	曲水の宴（午後2時）	城南宮



三十三間堂 通し矢



北野天満宮 梅花祭



清涼寺 涅槃会



白峯神宮 蹴鞠



京都には、長い歴史と伝統のなかで受け継がれてきた郷土芸能が数多くあり、四季おりおりにおこなわれています。

当財団では、これらの芸能をまもり育てるため設立当初より毎年「郷土芸能のつどい」を開催しています。この催しも今回ではや19回目を迎え、毎回会員の皆様をはじめ京都市民や観光客の方々に大変ご好評をいただいておりますが、今回も京都ならではの多彩な芸能を一堂に集め開催いたします。会員の皆様で、京都の伝統行事芸能を日頃なかなか見に行く機会の少ない方々は、ぜひこの機会にご覧いただきたいと思います。

■日時 昭和64年3月4日(土)午後3時開演

■会場 京都会館第1ホール

■出演 (順不同)
千本六斎念仏・川上やすらい花・嵯峨
大念仏狂言・久多花笠踊・二十五菩薩
お練供養・嵯峨剣鉾差し・よかろう太
鼓・上七軒俗曲

■入場料 前売券 1,300円
(座席指定)

[1月中旬頃より京都市内
百貨店プレイガイド、京
都會館サービスセンター
京都市観光案内所で発売]

当日券 1,500円

■構成・演出 いづのひろと

■主催 京都市・財団法人京都市文化観光資源
保護財団・社団法人京都市観光協会

第53回 文化財特別参観のご案内

しんしょうごくらくじ 『真正極楽寺(真如堂)』

今回は、真如堂で広く知られています洛東の名刹真正極楽寺を訪ねます。

回参観日時 昭和64年3月25日(土)

午後2時(参観時間約2時間)

回対象者 財団募金協力者(会員)とその家族1名(計2名まで)

回申込方法 住所・氏名・年令を記入し、返信用切手60円分を同封の上、封書によりお申し込み下さい。

回申込先 〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町
京都会館内

京都市文化観光資源保護財団 宛

回参加費不用

*お問い合わせは、財団事務局まで。なお、参加ご希望者が多い場合は、制限があります。

編 集 後 記



回旧年中は、皆様方の暖かい御支援、御協力を賜わりありがとうございました。当財団も本年で設立20周年を迎えることになりました。事務局では、これまで築いてきました基盤をもとに今後なお一層皆様の御期待に添えるよう努めていきたいと思います。今後ともよろしくお願い申しあげます。

回当財団の募金活動に昨年1年間に299件、約2,196万円の募金が寄せられました。誠にありがとうございました。本年も基金拡充にむけ一人でも多くの方々に当財団への御協力を呼びかけていきたいと思います。皆様の御支援、御協力ををお願いいたします。

—差別をなくして明るい社会をつくろう—